生活の中に演劇を

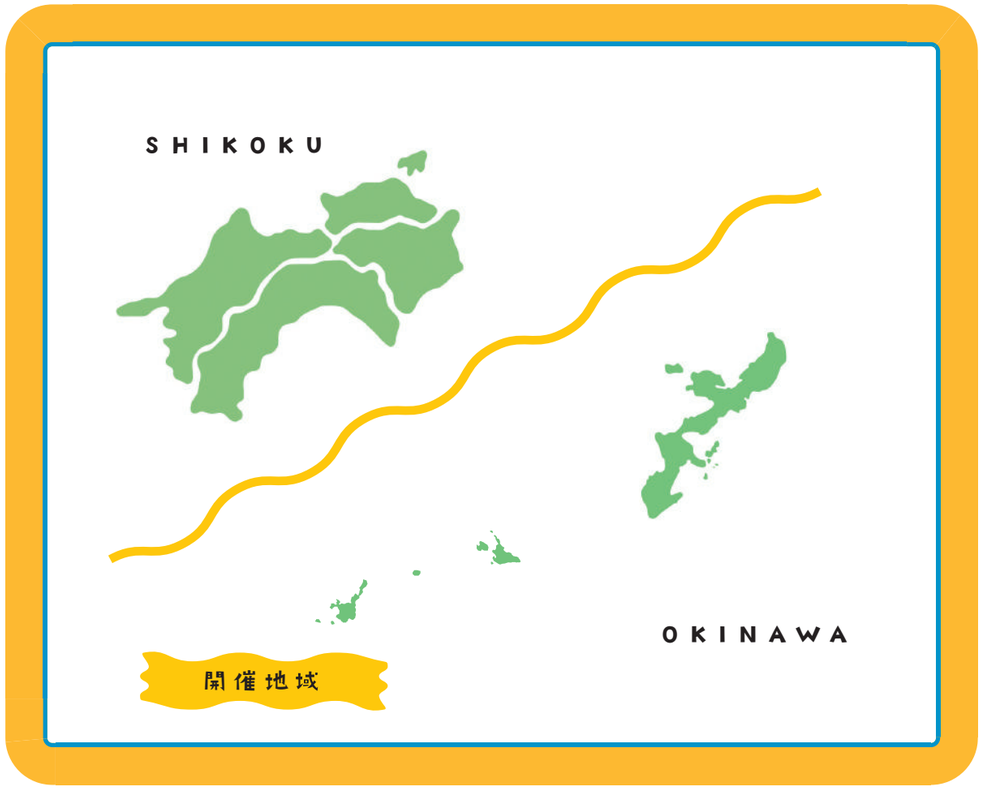
―演劇を楽しむ未来計画―

『アカシアの雨が降る時』
写真左より鈴木福、竹下景子、松村武
撮影／田中亜紀

公益社団法人 日本劇団協議会
Association of JAPANESE THEATRE COMPANIES

生活の中に演劇を

ー演劇を楽しむ未来計画ー



公益社団法人 Association of JAPANESE THEATRE COMPANIES
日本劇団協議会

趣旨・目的

質の高い演劇を全国に！

公益社団法人日本劇団協議会は正会員とともに、半世紀以上かけて全国に質の高い演劇を届けてきましたが、演劇公演を充分に実施できていない地域もあります。
2022年に当法人が実施した全国巡回公演事業（アートキャラバン）の観客アンケート(回答数23,222)では、日本全国の人々が生活圏の中で鑑賞機会を切望していることがわかりました。

広がる芸術体験の格差。

しかしながら、限られた大都市や演劇鑑賞組織が充実した都市以外で継続的に演劇を鑑賞・創造することは容易ではなく、芸術体験の地域間格差が拡大しています。
2020年からのコロナ禍の打撃によって、その格差はさらに大きくなりました。

2023年度四国3ヵ所、沖縄3ヵ所で実施！

この課題を解決するため、四国と沖縄県の2つのエリアで重点的に演劇の魅力・有効性を発信し、各地域の芸術体験機会の充実に貢献することを目的とし、今年度は、愛媛県八幡浜市、新居浜市、徳島県藍住町、沖縄県那覇市、名護市、宮古島市で公演やワークショップを実施しました。

事業概要・計画

2023年度事業概要

事業名：生活の中に演劇を 新しい活動拠点形成事業
公演開催地：四国（新居浜市、八幡浜市）、沖縄（那覇市、名護市、宮古島市）
WSのみ開催地：四国（藍住町）
開催内容：
①公演：10ステージ　＜観客数：のべ2,146人＞
②ワークショップ：7回　＜受講者数：のべ142人＞
③講演会：1回　＜受講者数：のべ190人＞
主催：公益社団法人日本劇団協議会
助成：文化庁芸術振興費補助金
舞台芸術等総合支援事業（キャラバン）
独立行政法人日本芸術文化振興会

事業の未来計画

ステージ1　演劇を楽しむ基盤づくり

自治体や劇場、地域団体の関係者、住民と共に、演劇は鑑賞・創造するだけでなく、演劇的手法を使って日常の考え方や感じ方をひろげられる可能性があり、地域課題の解決に役立つことを実感していただきます。また、地域の劇場で良質な舞台芸術にふれる機会をつくり、生活圏の中で演劇を楽しんでいただける基盤をつくります。

ステージ2　継続的に演劇を楽しむ環境づくり

劇団協は演劇を楽しむ機会を「1回限り」で終わらせません。演劇が住民の生活に寄り添えるよう、自治体や劇場、地域団体や住民とともに考え、継続的にサポートします。

ステージ3　演劇を楽しむ地域を「点」から「面」へ

劇団協は演劇の魅力や有効性を理解していただける地域をひろげます。演劇を通して地域課題の共有や解決が進み、演劇によって豊かなつながりをうみだすことをサポートします。

実施報告

～事業計画に掲げた以下の4つの項目に従って、地域別に検証～

Point 1　地域課題を共有できた？
Point 2　演劇を楽しむ層を開拓できた？
Point 3　演劇の魅力を伝えることができた？
Point 4　自治体、劇場、文化団体等との関係づくりができた？

四国

point 1　拠点と拠点、人と人とをつなぐ！

四国四県は、風土も歴史も異なり、香川県、愛媛県、徳島県、高知県の県民性(気質)の違いはよく知られています。また地理的条件から、香川は岡山、愛媛は広島、徳島は関西との結びつきが強く、外部の者は「四国」と一括りにしても、地元の人は「四国の一員である」という認識が少ない人が多いとわかりました。そこで四国の地域課題を「拠点と拠点、人と人をつなぐ」とし、各地域の独自性を大切にしながら、芸術体験の機会を増やすことを目指しました。

point 2　表現、コミュニケーションを楽しむ！

劇団1980が5月愛媛県西宇和郡の三崎高校で「『素劇』体験ワークショップ」、坊ちゃん劇場が9月徳島県板野郡の藍住町総合文化ホールで「三世代交流smileワークショップ」、サードステージが11月愛媛県新居浜市のあかがねミュージアムで「鴻上尚史演劇ワークショップ」と、それぞれの劇団の特徴を活かした演劇ワークショップを開催し、幅広い年代層の参加者に演劇の楽しさを体験してもらいました。さらに鴻上尚史氏の講演会では、主に「エンパシー」と「シンパシー」の違いから、人と人のコミュニケーションの重要性について参加者と共に考察しました。

point3　共感し、想像力溢れる舞台 ！

八幡浜市公演の劇団1980『素劇 楢山節考』は、何もない舞台空間に箱と紐だけで舞台装置を作り、観客の想像力の中に演劇表現を求めた演劇スタイルで、これまでに経験した事のない演劇の楽しさを提供できました。

新居浜市公演のサードステージ『アカシアの雨が降る時』は、鴻上作品と魅力ある３人のキャストへの期待の高さから、早い段階で全公演のチケットが完売しました。過去と現在と未来を3世代の登場人物によって描き出すことによって、それぞれの世代の観客に共感できる舞台として大好評を得ました。

point4　継続的に演劇体験ができる拠点の第一歩に！

八幡浜市公演『素劇 楢山節考』では、「南予で演劇を観る会」が公演運営の中核を担いました。昨年、実行委員会形式で立ち上げた「南予で演劇を観る会」は、2022年度アートキャラバン事業として俳優座劇場プロデュース『音楽劇 人形の家』の宇和島公演を成功させた実績があり、今後は継続的に南予地方(愛媛県南部)で演劇体験ができる拠点になり得る可能性を秘めています。

新居浜市公演『アカシアの雨が降る時』では、新居浜市・西条市で通信事業を展開するハートネットワークが運営協力として参加しました。あかがねミュージアムは、市民・企業・行政等が一体となって運営されており、鴻上尚史氏が監修のもと設計・建設された多目的ホールは、拠点形成において理想的な会場といえます。その一方で、鴻上氏のインフルエンスによって成立しているとも考えられ、サードステージ以外の劇団公演によって同様の成果を収めることができれば、継続的に演劇体験できる拠点として期待が持てます。

沖縄

point 1　戦争証言を語り継ぎ、平和教育へ！

沖縄県は、太平洋戦争末期に本島で我が国唯一の地上戦を経験し、その後27年にも及ぶ米軍統治時代を経て本土復帰、今も続く米軍基地問題、そして現在では南西諸島の防衛強化など、他県とは異なる特別な歴史と地域的背景を背負っています。そのため県民の平和への希求は他の地域よりは強いものがあるものの、戦争体験者が少なくなる中、学校での平和学習の機会が減少し、世代が下がるにつれ、その意識は希薄なものになっているようです。そこで、地域課題を「戦争証言を語り継ぎ、平和教育につなげる」こととしました。

point 2　平和を考える新しいプログラムを開発！

沖縄県を拠点に活動する劇団チーム・スポット・ジャンブル(以下TSJ)と劇団青年座の俳優たちが協同して地域課題の解決に役立つ「平和を考える」演劇ワークショップのプログラムを開発しました。準備が間に合わず那覇市では実施できませんでしたが、宮古島市と名護市では、演劇公演１か月前の11月と直前の12月にワークショップを開催でき、小学5年生から70歳代まで幅広い年代の方々が参加しました。TSJと青年座が、試行錯誤を重ねながら作り出した「平和を考える」ワークショップは、対象地域、対象年齢、参加人数を問わない汎用性の高いプログラムです。今後はさらに、改良を重ね、他の地域でも開催することで拠点形成の一助にしたいと考えています。

point 3　アンケートから分かる高い満足度！

劇団青年座制作による津嘉山正種ひとり語り「沖縄の魂」シリーズは、観劇アンケートの感想が示す通り、『瀬長亀次郎物語』『命口説』両作品ともに圧倒的な支持を得ました。沖縄6回公演(那覇3回、宮古島2回、名護1回)の総来場者数は1,282名。そのうち観劇アンケートに77.3%にあたる991名からの回答があったのは、特筆すべきことで、さらに本公演に周囲の方にどれくらい勧めたいか(作品の推奨度)については、全回答のうち、推奨者とされる10点～9点の回答者が全体の60.9%を占め、「沖縄の魂」シリーズへの関心の高さと本事業への期待感の表れであり、演劇の魅力を享受した証左といえます。

point 4　新たな連携から生まれる次の可能性！

今回上演した那覇市、宮古島市、名護市では、芸術を鑑賞する環境が大きく異なり、それぞれ独自の形態で公演を運営しました。

那覇市およびその周辺地域においては、演劇公演が可能な会場が複数あり、これまで劇団公演を受け入れてきた実績とその経験から、演劇公演をコーディネートできる人材と機関(劇場・企業・文化団体)が充分に備わっています。今回の公演は、特別協力として参画した沖縄タイムス社文化事業部がその役割を担いました。芸術イベントにおいて、ハード面、ソフト面の両方を兼ね備えた那覇市は、沖縄県の活動拠点として今後も中心的な役割を果たしていくことになるでしょう。

宮古島市では、コーディネーターとして参画した喜舎場梓氏の人脈と、昨年度、当法人が実施した戦略的芸術文化創造推進事業「黄金(くがに)文化再発見」の際に交流した文化団体との関係を活用して公演運営にあたりました。ワークショップで協同したTSJメンバーのサポートも効果的に作用しました。

集客面では、広報宣伝活動の遅れから期待した程の結果は残せませんでしたが、ワークショップと演劇公演を通して、宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、市民劇団「ぴん座」、児童劇団「かなやらび」との関係は強化され、宮古毎日新聞、宮古新報、エフエムみやこ、宮古テレビなど地元メディアと新たな関係を構築できました。

名護市では、那覇公演と同様に沖縄タイムス社の特別協力のもと、主に新聞紙上で宣伝活動を展開しました。11月、名桜大学人間健康学部看護学科の4年生を対象に開催したワークショップでは、普段演劇にふれる機会の少ない大学生にも、この手法が有効であることが確認でき、今後につながる特別な関係を結ぶことができました。当初こそ、名護市民会館との連携がうまく取れず、地域の文化団体との関係づくりに苦労しましたが、最終的には、名護市文化協会や伊江島郷友会の協力もあり、200名を超える観客を迎え、成功裏に収めることができました。

劇団青年座　紫雲幸一

愛媛県八幡浜市

「南予で演劇を観る会」が拠点とする愛媛県南予地区は、西日本豪雨で甚大な被害を受け、2019年には唯一の映画館が撤退、公共交通機関や病院など必要なものまで切り捨てられつつある地域です。先日は「40年後の人口減少率は約70％」という衝撃的な予想が発表されました。私たちはこの南予を、演劇の力でなんとか活性化したいと思っています。

2023年5月の劇団1980「素劇　楢山節考」八幡浜公演が「舞台芸術等総合支援事業」の対象となったのは本当にありがたいことでした。「素劇とは白い紐と黒い箱で場面を創る演劇スタイル」と言ってもなかなかわかってもらえず、集客に苦労しました。そして当日、ただの白い紐が俳優たちの手によってかやぶき屋根の家に変わったとき、客席が「おおっ！」とどよめきました。百聞は一見にしかず、一瞬で演劇の魅力が客席に伝わったのです。アンケートには「また八幡浜でやってほしい」という声がたくさん寄せられました。

公演前日には愛媛県立三崎高校でワークショップを行いました。大きな風車が立ち並ぶ風光明媚な佐田岬にある三崎高校は、少子化のため全国から生徒を募集しています。約2時間のワークショップは「見立て遊び」「役割遊び」「グループワーク」などを通して「演劇とはどういうものか」を感じ取るものでした。生徒たちは白い紐を使い、大人では思いつかない自由な発想で「魚」「岬と風車」「灯台」「うどん」などを創り上げました。生演奏に合わせて発表する生徒たちの姿はいきいきと輝いており、きっと心に残る貴重な体験になったと思います。常々「若い人にこそ演劇体験を」と思っていましたが、今回の助成によって実現でき、心から嬉しく思います。

実施して改めて感じたのは、演劇には「想像力」が不可欠だということです。白い紐からかやぶき屋根を想像する力、役の気持ちを想像する力、仲間の思いを想像する力…。想像力がなければ、演劇は成り立ちません。しかし、何でもインターネットで調べられる社会では、自分の頭で想像し考えることをおろそかにしがちです。デマや誹謗中傷、世界中のさまざまな分断も、“想像力の欠如”が影響しているように思います。だからこそ、演劇を通して培った想像力は、きっと今を生きる力になります。

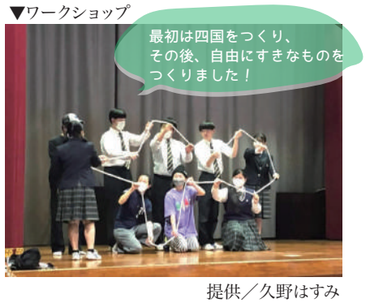
将来、活気ある南予をつくっていくために、継続した演劇体験が可能な地域にしていきたいと思います。ぜひ今後ともご支援いただけると幸いです。

南予で演劇を観る会　久野はすみ

▼公演

撮影／宮内勝
写真中央／柴田義之

▼ワークショップ



提供／久野はすみ

公 演

素劇『楢山節考』
原作：深沢 七郎
構成・演出：関矢 幸雄
出　演：柴田義之、藤川一歩、
　　山本隆世、上野裕子ほか
制　作：劇団1980

日　時：2023年5月13日（土）14：00～
会　場：八幡浜市文化会館 ゆめみかん
鑑賞者数：222名

ワークショップ

「素劇」体験ワークショップ
黒い箱と白いひもを使って「みんなでつくる」
楽しさを味わおう！
講　師：柴田義之、山本隆世、木之村達也、
　　戸谷昌弘、上野裕子、
　　関根麻帆（以上、劇団1980）、
　　後藤まさる（ミュージシャン）

日　時：2023年5月12日（金）13：50～15：40
会　場：愛媛県立三崎高等学校
受講者：3年生（41名）

愛媛県新居浜市

愛媛県新居浜市は、四国のほぼ中央、瀬戸内の燧灘に面したところにある人口約１１万人の都市です。まちの成り立ちは、江戸時代の別子銅山開坑以来、製錬を主体とした企業城下町として栄え、東予新産業都市の中核として瀬戸内有数の工業都市に発展しました。

あかがねミュージアムは、旧新居浜市郷土美術館を引き継ぐ形で、美術館とイベントホールなどの機能を持つ総合文化施設として2015年に開館しました。施設の中には、起源は平安時代あるいは鎌倉時代まで遡るといわれる新居浜市の伝統文化「新居浜太鼓祭り」で使用される太鼓台（山車）が展示されており、伝統文化継承の役割も担っています。

愛媛県内では、美術館は愛媛県美術館（松山市）と新居浜市美術館（あかがねミュージアム）を中心に1年を通じてクオリティの高い美術に触れることができ、当館でも市内外から多くの方に来場いただいており、中四国において美術への関心の高さが伺えます。

文化公演においては、ホール収容人数が新居浜市内の施設では最大約1000人と小規模のため、大きな公演開催は困難な環境にありますが、市民の文化・芸術発表は活発に行われており文化人口は多いと感じています。このような中、当館多目的ホールは、新居浜市出身の鴻上尚史氏監修のもと設計・建設され、小規模の演劇や音楽公演に適した250人の収容ホールです。開館以来演劇を中心に様々な公演が開催され新居浜市において新たな芸術文化に触れる機会が提供できるようになりました。

今回の事業では、その鴻上尚史氏の演劇公演、講演会、ワークショップを開催していただき、市内外から幅広い年代の方にご参加をいただきました。公演においては、早々にチケットはSOLD OUT、講演会は平日昼間にもかかわらず予約整理券は予定数を上回る人気でした。また、ワークショップでは、参加した方から、教育現場でのいじめや不登校などの問題を演劇ワークショップを通じて解決できるよう、子供や教師のコミュニケーション力を養うことをテーマに継続的な開催の要望を、新居浜市にいただくなど本企画に多くの方が共感いただいたと実感しました。

そのほか、開催日程の調整が難航したこともあり、公演回数や開催曜日、時間が限定され、来られなかったお客様も多くいらっしゃり、日程調整の難しさを痛感しました。

人口減少、少子高齢化の地方課題及び教育現場でのいじめ、不登校などの問題を抱える当市において、演劇を一つの課題解決策として位置付け、魅力あるまちづくりを目指すことができるよう、継続して実施いただきたいと当館及び市民が熱望しています。

株式会社ハートネットワーク　伊藤直人

公 演

『アカシアの雨が降る時』
作・演出：鴻上 尚史
出　演：竹下景子、鈴木福、松村武
制　作：サードステージ

日　時：2023年11月28日（火）18：30～／
　　11月29日（水）12：30～／
　　16：00～
会　場：あかがねミュージアム多目的ホール
鑑賞者数：642名

ワークショップ

『鴻上尚史演劇ワークショップ』
日　時：2023年11月30日（木）18：00～21：00
会　場：あかがねミュージアム多目的ホール
受講者：一般（30名）
講　師：鴻上尚史

講 演 会

『コミュニケーションのヒント』
日　時：2023年11月30日（木）13：30～15：00
会　場：あかがねミュージアム多目的ホール
講　師：鴻上尚史

▼講演会

提供／株式会社ハートネットワーク

愛媛県新居浜市

講師の鴻上は、自身が子供のころ新居浜で年1～2回お芝居を観たことが現在の自分につながっているそうです。今回のように、ワークショップや講演会を実施することで、次世代の演劇人にとってのきっかけの一つになればと思います。

また、今回ワークショップと講演会を実施したことで、継続的にこのような事業を行ってほしいというご要望をすでにいただいています。

講演会、ワークショップともに定員に達したということで、今後、実施時間や参加人数、回数など、規模や形式を変えて（例；学生限定の講演会や、演劇未経験者のみのワークショップなど）実施していくことも検討できるのではないかと考えています。

サードステージでは、東京で年数回ワークショップを行っていますが、参加者の方は俳優活動をしている方、または目指している方が多いです。そういった方に向けたワークショップはもちろん非常に重要で、これからも継続して行うべき活動ではあります。

その上で、演劇の裾野を広げ、関東圏以外でも演劇をもっと活性化していくために、好きな人だけが見るもの=演劇、というだけでなく、演劇は誰でも参加できる、演劇というフィルターを通して日常の考え方や感じ方も広げていける、という事をもっと多くの方に周知していくためにも、本事業は大変有意義なものだと、運営側ではございますがそう感じています。

サードステージ　池田 風見

今回は3時間のWS！
参加者は、
中学生から70代までの30名！

緊張をほぐすよ！

ワークショップ

内容は？？

①シアターゲーム
②声の五つの要素（大きさ、高さ、速さ、間、質）を知る！
③セリフを喋る！
④「文節ゲーム」にトライ！
　文節ごとに一人ずつ文章を区切り、次の人にバトンタッチし、文章を作るゲーム。
　まずは全員で、半分、4人、二人一組、と人数を減らした編成にしていきました。
⑤物語発表！
　二人一組で文節を区切って作った物語を発表しました。

声の要素を実感！

「文節ゲーム」の目的は？？

①物語を作る楽しさを味わう
②相手の人と協働する楽しさを味わう
③予期しない展開に怯えるのではなく、
　先が見えない事を楽しむためのものです。

「演じることを楽しむ」
という内容で、幅広い参加者の方に
興味を持ってもらうことができました！

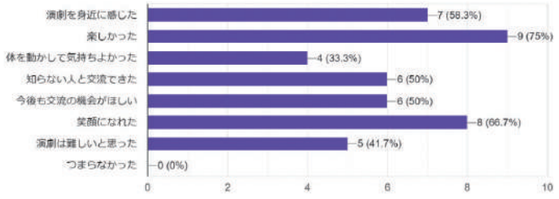
受講者の声

演劇は、観客と演者で作るものというところに魅力を感じました。心と身体の調和したところに、とても良い表現があるように思いました。場違いなところへ行き、緊張していたのですが、家に帰ると、疲れるどころか、背中も軽くなり、気持ちもスッキリしていました。

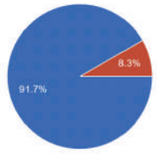
表現をする楽しさを感じることが出来ました。声の要素について知らなかった使い分けも知ることが出来て、初めて知ることが多く楽しかったです。

受講者アンケートより

質問：WSに参加して感じたことを教えてください。



質問：次回もこのようなWSが
あったら参加したいですか？



「参加したい」
という回答が9割！

坊っちゃん劇場（愛媛県）より

◎愛媛の劇団、劇場として、四国の演劇状況をどのようにみていますか？

坊っちゃん劇場を設立し18年目を迎えますが、当初は舞台芸術を鑑賞したことがないという人が殆どでした。東京は日本の文化、芸術の中心地であり、多くの劇場、音楽会場が集まっています。常に鑑賞できるコンテンツが身の回りにあります。また、教育機関も多数あります。それに比べて、地方の状況は、演劇鑑賞は殆どの人の関心事ではなく、非日常の出来事であります。教育機関は殆どありません。但し、近年インターネットの普及や人的交流により、情報は手軽に入手することができるようになり、徐々に演劇に対する関心も高まり、そこを目指す人も出てきております。しかしながら、東京と環境の全く異なる地方における演劇の在り方という事になると、東京スタンダードのこれまでとは全く異なったアプローチが必要なのかもしれないと考えております。

◎『アカシアの雨が降る時』の感想、良かった点、改善点は？

県庁所在地でない新居浜市での公演であったにも関わらず、満席のお客様を迎えられていたことに敬服しました。魅力あるキャスティングや製作陣。周到なプロモーション活動が実施されたと感じました。初めて舞台作品を味わう、楽しむ喜びを感じることができたならそれは演劇ファンを拡大すること、ひいては心豊かに日常を過ごすきっかけを提供することの成功だと感じました。映像とは違う鑑賞の仕方を覚え、没入し心揺さぶられる体験はまた次の舞台作品を求める気持ちへと育っていきます。そういった意味で、この作品は解りやすく素晴らしいと感じました。また、観ている側の心が舞台上に生きる存在に吸い込まれていく、そんな舞台の醍醐味でもある空気を感じました。

◎藍住町でのワークショップを終えて

人と人をつなぐ場を演劇体験によって叶えるとすれば、「心を開くという体験の楽しみ」をまず感じてもらうことが必須だと感じました。まずは、舞台を観に行く機会を増やす事が単純に必要で、感動体験のあとに行動や趣向が来るのかもしれないと感じています。

本企画3カ年計画での活動拠点形成の基盤は、四国においてまだまだ出来ていないと言わざるを得ません。首都圏に目線が向きがちな地方都市の劇場間の繋がりを密にすることで、低予算でもそれぞれの地域に根付いた観劇の機会を増やす連携が創れるのではと考えます。
「関わらないから分からない」では無く、先ずは関わってみて「どう感じる？」の実践を続けて行くことが遠回りのようで、近道なのかもしれないとワークショップを運営していて感じたことの一つです。

◎今後どのようなことをキャラバン事業に期待しますか？

・はじめて舞台鑑賞をする方にとっても理解しやすい演劇、鑑賞の動機づけになり得る動員力ある俳優や製作陣を起用した良質な作品の鑑賞機会を多く提供し続けること
・鑑賞する喜びを持続させるに能う作品の鑑賞機会の創出
・長期にわたるワークショップでしかかなえられない「心をオープンにする」体験機会の継続した取り組み
・表現する喜びを味わえる発表機会の継続した取り組み

ワークショップ

『三世代交流 smile ワークショップ』
日　時：2023年9月18日（月祝）10:30～12:30
会　場：藍住町総合文化ホール交流室2（徳島県）
受講者：一般（9名）
講　師：中村茂昭（坊っちゃん劇場）、高橋真冬（UZU ARTS）

沖縄県那覇市

沖縄県出身の俳優・津嘉山正種さんによる朗読劇「津嘉山正種ひとり語り・沖縄の魂シリーズ」は、2018年に「人類館」、19年「瀬長亀次郎物語」、22年「戦世(いくさゆう)を語る」を那覇市のタイムスホールで上演してきましたが、シリーズ第4弾目の新作「命口説(ヌチクドゥチ)」を2023年6月30日、7月1日、2日の3日間(3公演)にわたってタイムスホールで上演致しました。3公演に合計846人の皆さまにご来場いただき、盛会裏に終了することができました。

今回の公演は、公益社団法人日本劇団協議会が主催、当社は特別協力として広報支援やチケット販促、観客動員、公演当日のスタッフ運営、会場のタイムスホールの提供等に協力致しました。
本公演は文化庁の助成対象事業として開催することができました。本公演が無事盛会裏に終了することが出来ましたのは、ひとえに文化庁様や主催の日本劇団協議会様、劇団青年座様の支援の賜物と心より 御礼申し上げます。

本公演の開催にあたり、当社はじめ地元テレビ、ラジオ局などのマスコミ社を中心に広報活動を展開し 入場券の販売や集客につなげました。

また、公演前には、津嘉山さんの母校である那覇商業高校に津嘉山さんが表敬訪問し、同校の演劇部の 生徒や学校長、教頭先生、同窓会会長と面会、関係者を本公演に招待いたしました。母校への表敬訪問、 招待券の贈呈は、2018年のシリーズ第1弾公演から継続して実施しています。

このような広報活動が功を奏し、公演日には、本シリーズ公演に関心を寄せる熱心なファン、那覇商業高校の学生、教職員、同窓会関係者、県内の演劇関係者などの10代から90代まで老若男女幅広い層の皆さまにご来場いただきました。

公演日に来場者へアンケートのご協力をいただき、3日間合計654件(来場846人中・77.3%)の多くの皆さまから回答を頂きました。回収率の高さから改めて津嘉山正種さんのひとり語り「沖縄の魂」シリーズ公演への関心の高さを感じました。

津嘉山正種さんのひとり語り「沖縄の魂シリーズ」は2024年7月に第5弾目の公演を那覇市のタイムスホールで上演する予定です。当社といたしましては、津嘉山さんが魂を込めて語る「沖縄の魂シリーズ」第5弾目の公演に大いに期待するとともに、本公演の成功に向け尚一層尽力する所存です。

沖縄タイムス社事業局文化事業部　渡久川 兼治

公 演

津嘉山正種ひとり語り『命口説』
原作:謝名元慶福
構成台本・演出:津嘉山正種
制　作:劇団青年座

日　時:2023年6月30日(土)19:00～／
7月1日(土)14時～／
7月2日(日)14時～
会　場:タイムスホール
鑑賞者数:846名

提供／劇団青年座

沖縄県名護市

迫真の語りで瀬長亀次郎さんの生涯を表現する津嘉山正種さん＝24日、名護市民会館中ホール

一人語り熱演 聴衆を魅了

名護で津嘉山さん朗読劇

【名護】県出身の俳優、津嘉山正種さんの一人朗読劇「沖縄の魂 瀬長亀次郎物語」（主催・日本劇団協議会、特別協力・沖縄タイムス社、制作・劇団青年座）が24日、名護市民会館中ホールであった。

米軍統治下の沖縄で民主主義の確立を目指し、民衆と共に立ち向かった政治家・瀬長亀次郎さんの生涯を描いた作品。津嘉山さんは情感あふれる語りで熱演した。

ウチナーグチを織り交ぜて登場人物の心情を表現。

瀬長さんの演説場面では「沖縄80万人民が声をそろえて叫んだならば、太平洋の荒波を越えてワシントン政府を動かすことができます」と力を込めた。

瀬長さんの長女の瞳さん（86）＝大宜味村＝も来場し「父の面影がまざまざと浮かんだ」と絶賛した。読谷村から来た西平友子さん（70）は「特に若い世代の人たちに、瀬長さんの不屈の精神を学んでほしい」と期待した。

（北部報道部・下地広也）

©沖縄タイムス社2023年12月25日

観客の声

とても素晴らしかったです。「せんそう」も「平和」も…。「何か」を考えるキッカケになると思います。（40代）

初めてこのような公演をみて迫力におどろいた。1人で語っているのがこんなにもおもしろいと感じすてきな時間を過すことができた。またみてみたいです。（10代）

「東京に行かないと観られない、体感できない」のではなく、これからも地方での公演を増やして欲しい！！ 全国でもやって下さい。（60代）

映画と違って、演劇のすごさが伝わってきた。演劇のすごさに言葉がありません。とにかくすごい。（70代）

年齢層が高いですね。若い人にもぜひ見てほしい。高校で上演して、ぜひ若い世代に伝えたい。終了後じわりじわりとても悲しくなり、涙がでてきました。（40代）

今、学校で平和学習をしていて、父にさそわれて見にきました。自分が沖縄戦のころにいたわけじゃないけど、演げきで学べることができて、新しい学びができました。（10代）

※那覇市、名護市、宮古島市のアンケートより

公 演

津嘉山正種ひとり語り
『沖縄の魂ー瀬長亀次郎物語』
原作:謝名元慶福
構成台本:津嘉山正種
演出:菊地一浩
制　作:劇団青年座

日　時:2023年12月24日(日)15:00～
会　場:名護市民会館 中ホール
鑑賞者数:209名

沖縄県宮古島市

令和5年12月14日の夕方、宮古島市未来創造センターの多目的ホールには多くの人が詰めかけていた。宮古島市で初公演となる津嘉山正種氏によるひとり語り「沖縄の魂―瀬長亀次郎物語」を楽しみに来場した人々だ。

津嘉山氏の語りは、現代を生きる祖父と孫との会話の中で、不屈の政治家瀬長亀次郎の物語へと進んでいく。ひとり語りとは思えないほど声のトーンや色が変わり、登場人物が目の前にいるかのようで物語の中へ引きこまれていった。占領下にあった当時の沖縄のことや祖国復帰のために戦い、真っ直ぐに生きた瀬長亀次郎の凄さを改めて感じた1時間30分だった。

語りが終わると会場から大きな拍手が沸き、帰り際には、語りの素晴らしさを讃える声とともに「来て良かった！」「感動しました。ありがとうございました」等の声が多く聞こえた。

2日後の12月16日は、別の演目「命口説」の語りがあった。ひとりの老人が基地の近くで観光客を相手にガイドをする話だ。皮肉まじりに話す老人の苦しみ、怒り、虚しさや悲しみに胸が痛んだ。

現在、宮古島にはアメリカ軍の基地はない。先の戦争で空襲はあったが地上戦はなかった。宮古にいると基地や沖縄戦のニュース等にどこか他人事のように感じる時がある。宮古島でこのような公演をすることは大きな意義があり、大切なことだと思う。

日本劇団協議会は先の公演以外にも11月、12月の2回、「演劇を使った平和を考えるワークショップ」を開いている。小学生から70代まで様々な年齢層が集い、演劇のプロ集団、青年座やチームスポットジャンブルの方たちと平和について考え物語を作るというものだ。参加者の皆さんは和気あいあいと楽しそうで、子どもたちにとっても貴重な経験だったことだろう。現在、どの分野においても若い世代に継承することの難しさが課題となっている。自分を表現することを学びながら、平和について考えることは継承という意味においても大きな効果があると思う。

ひとり語りの公演を見終わってから1カ月以上が経つが、ニュースで政治家の話が出ると、ふと津嘉山氏の語りを思い出す。

宮古島においてプロの演劇を観る機会はそう多くない。今後もぜひ、芸術性の高い演劇が上演されることを期待している。

今回の企画をしてくださった日本劇団協議会をはじめ、津嘉山正種氏、スタッフの皆さんに感謝の気持ちを込め、ぎ゜むぬ　すぅくから　たんでぃがーたんでぃ（心よりありがとうございました！）

一般社団法人 宮古島市文化協会事務局長　松谷初美

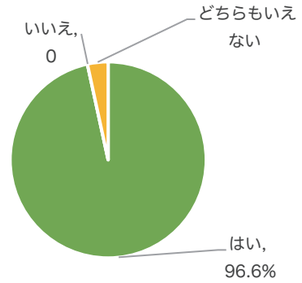
公 演

津嘉山正種ひとり語り
『沖縄の魂ー瀬長亀次郎物語』
『命口説』
制　作：劇団青年座

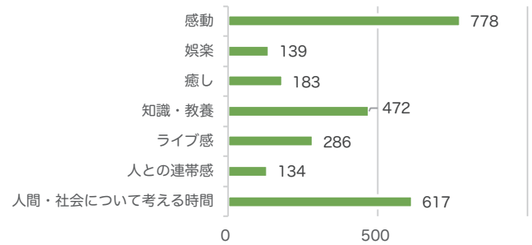
日　時：2023年12月14日（木）19:00～／
12月16日（土）15:00～
会　場：宮古島市未来創造センター多目的ホール
鑑賞者数：227名

沖縄県那覇市・名護市・宮古市観客アンケート結果（抜粋）

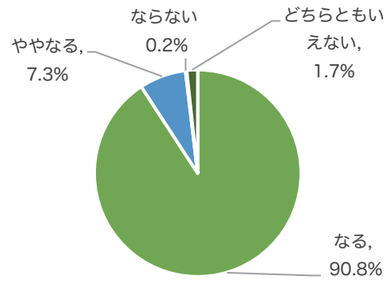
質問：今後も演劇の公演を鑑賞したいと思いますか？



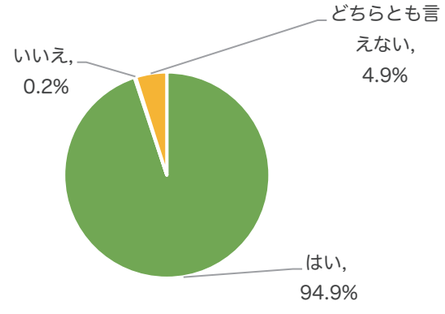
質問：演劇を観ることによって何が得られると思いますか？



質問：戦争証言を演劇にすることで、平和学習になると思いますか？



質問：今後も沖縄の戦中・戦後を語り継ぐ作品を鑑賞したいと思いますか？



ワークショップコーディネーターより

沖縄県（特に離島）は輸送コストなどの現実的な経費の問題が大きく影響し、演劇を鑑賞する機会は多くありません。その為、観客も育ちにくい状況が続いています。しかし「僻地にも良質な鑑賞体験を！」という働き掛け方には、みんな目を丸くし「僻地ってどこのこと？もしかして私たち島のこと？」とメッセージがずれて伝わり、「施し頂く程ではないので」と突っぱねてしまうようなことも起こり兼ねません。決して求めていない訳ではないのですが、事業名にあるように「生活の中に演劇を」馴染ませる必要があるのだと思います。演劇に慣れ親しむ場を持つことで、地域と演劇の繋がりを作る。一度きりの鑑賞体験だけではない地道な活動が、地域が望むことと合致した上で、関係を築いていくことができるのではないでしょうか。私は県内で、TEAM　SPOT　JUMBLE（以下、TSJ）と共に、地域課題を掘り起こし、その課題と向き合うことを目的とした演劇ワークショップ（以下、WS）を展開しています。参加者が関心を寄せるテーマに基づき、創作活動を通して、課題の解決・緩和に繋がることを目指します。今回、WSを実施するにあたり、企画されている公演と地域課題に共通点はないか探し始めました。

上演される「沖縄の魂」シリーズは、目まぐるしく動く歴史の中で、翻弄されながらも必死に生きる沖縄の人々が描かれています。そして今も尚、問題を抱えている沖縄の実情を、若者に伝えていきたいという津嘉山正種さんの熱い思いがありました。沖縄では6月23日の慰霊の日などを中心に、沖縄戦を学ぶ平和教育が根付いています。しかし、若者たちからは「想像できない」「ピンとこない」という素直な感想を聞くことが多くなりました。戦争証言を直接聞くことができなくなりつつある今、どのように語り継ぐことができるのか。それは戦後に生まれた私たちの課題でもあります。そこで、公演が開催される前に、その「想像できない」部分を補う事ができないかと考え、TSJと劇団青年座が協働し、演劇WSのプログラムを作りました。

その名も『幸せ村選手権』。5つのグループが、それぞれの村の民になりきり、よその村と交渉などしながら、豊かな村を目指します。『自村の幸せを追求する先に、争いが起こる可能性があるのではないか』ということをみんなで考えるのです。交渉したこと、村で考えたことを振り返り、私たちの中に『争いの卵』が生まれていなかったかを問いかけます。参加者の方が「今起きている戦争は、自分に関係ないことのように感じていた。けれど私たちが、もしそのような状況になった時に、平和的解決を選択できるかどうかは、日頃から関心がなければ導き出せないかもしれない。」と語っていたことが印象的でした。参加者が村人になりきることで、体験から心の動きを感じ取り、参加者同士で考え合う場を持つことができました。自分ごととして考えることで、生まれた気づきなのだと思います。

そして、もう一つの目標、演劇の魅力を知るきっかけとなったかどうかについては、参加者に実施したアンケートが証明しています。「今後、演劇やミュージカルを見てみたいか」という問いに、WSに参加した全員が「はい」と回答しているのです。簡単に観客人口が増える訳ではありませんが、「生活の中に演劇」が定着するための第一歩となったと実感しています。

最後に。劇団二団体によるプログラム開発はとても刺激的でした。それぞれの素直な思いを語り合い、互いに齟齬がないよう対話を続け、WS実施時間よりも、事前打ち合わせと振り返りが長いこともありました。活動拠点が異なる二つの劇団が、時間の制約や、物理的な距離を越えられたのも『演劇』が持つ力なのかもしれません。

喜舎場 梓

ワークショップ

演劇を使った平和を考えるワークショップ
講師：安藤瞳、小暮智美、嶋田翔平（青年座）
　　蔵元利貴、比嘉恭平、与那嶺圭一（TSJ）
①宮古島
日　時：2023年11月18日（土）14:30～16:30
　　12月15日（金）18:00～20:00
会　場：宮古島市未来創造センター 多目的ホール、研修室1～3
受講者：一般（20名、17名）

②名護市
日　時：2023年11月20日（月）13:00～15:00
　　12月23日（土）14:00～16:00
会　場：名桜大学
　　名護中央公民館1・2研修室
受講者：名桜大学看護学科4年生（19名）
　　一般・名護市ジュニアリーダークラブ（6名）

沖縄　第3種郵便物認可

戦争のきっかけ考える

名桜大生と劇団ワークショップ

「自分のことだけ」の先に

村の存続のために話し合う劇団青年座の小暮智美さん（右）と名桜大の学生＝20日、名桜大学

【名護】劇団青年座と県内の劇団「チーム・スポット・ジャンプル（TSJ）」の俳優たちが20日、名桜大学看護学科4年生で、演劇を使った「平和を考える」ワークショップ（主催・日本劇団協議会、特別協力・沖縄タイムス社）を開催した。俳優と学生たちが五つのグループに分かれ、ゲーム感覚で対立する問題の意見一致を目指し、話し合いで平和的解決ができるかに取り組んだ。（北部報道部・松田駿太）

ワークショップでは、俳優と学生たちは持っている資源や食料などにばらつきのある五つの村に分かれ、それぞれの存続に向けて話し合いで食料やお金をやりとりした。

そこに大寒波が到来し、食料を確保しないと村がなくなってしまう状況が発生。各村は寒波をしのごうと、他の村と同盟を組んで食料を分け合ったり、貸していたお金や食料を返すよう求めたりした。

資源的に全ての村が生き残るのは難しく、議論は平行線をたどる。終盤は存続を諦める村や、吸収合併を模索する村が出てきた。

最後には、それぞれの村に「二つの村から全ての食材やお金を奪えるカード」が配られ、使うかどうかを考えた。

名桜大の大城紗里さん（22）は「これまで戦争が起こる理由が分からなかったが、生き残るための食材確保が難しい状況で『他の村から奪えるカード』をもらったとき、正直ラッキーと思ってしまった。自分たちのことだけを考えているうちに視野が狭くなっていた」と振り返った。

ワークショップの進行を務めたTSJの与那嶺圭一さん（38）は「平和学習などで戦争の恐ろしさを学ぶ機会はあっても、戦争のきっかけはなかなか学べない。自分の村だけの幸せを求めた先に争いが起きることを、当事者目線で知ってほしかった」と語った。

©沖縄タイムス社2023年11月24日

受講者の声

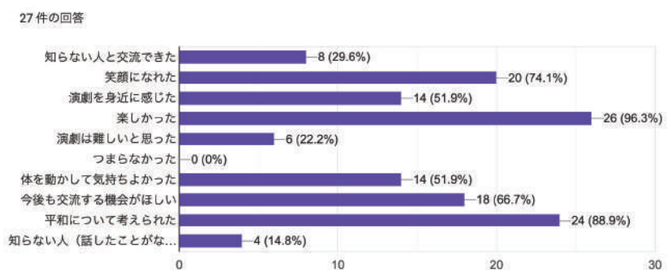
何気なくゲームをやっていたが、視点を変えると現代社会で起きている戦争の仕組みについてであった。ゲームの中での、思考や想いを振り返れて、自然と平和について考えることにつながっていた。

ゲームで、奪おう取ろうと決めていても、実際に相手の顔を見たらできないことが多かったので、人はコミュニケーションをする時に、感情を多く動かしてるんだと感じた。戦争の当事者になると、自分のことしか見えなくなることが、こういうことだと知った。ニュースを見る時などに視点が変わると思ったら、参加してよかったと思う。

平和について考えるきっかけになったと思う。同じグループで同じ選択をしていても意見を聞くと一人ひとり違っていて、個人同士でのまとまりですら難しいのに地域や国など大きな分類になってくると1つの選択が人間どころか地球・宇宙に影響してきて、本当に面倒だなと思った。面倒な問題について考えるのは重要だと思うので、子供のうちからみんなで出来るのはいい機会だなと思う。

沖縄県名護市・宮古島市ワークショップアンケート結果（抜粋）

質問：今日のWSに参加して感じたことを教えてください。



おわりに

【四国】

本事業１年目となる2023年度は、演劇公演を愛媛県八幡浜市と新居浜市、ワークショップを愛媛県西宇和郡、新居浜市、徳島県板野郡で実施し、継続的に芸術体験ができる拠点となるように基盤作りを行いました。２年目の2024年度は、本事業の範囲をひろげ、イッツフォーリーズ『おれたちは天使じゃない』が、愛媛県八幡浜市、高知県四万十市、香川県多度津町の三県三地域での上演を予定しています。今はそれぞれが独立した「点」でしかありませんが、新たに掘り起こしたこれらの地域拠点と、県庁所在地で演劇鑑賞組織を持つ高松市、松山市、徳島市、高知市と連携し、点と点を結んで「線」にして四国四県の演劇ネットワークを構築することを目指しています。そのためには、拠点と拠点の情報共有が不可欠ですが、それすらもままならないのが現状です。今後は当法人および四国と関係が深い当法人の正会員が主導して横のつながりを強化していく必要があります。

【沖縄】

2023年度は、本島では那覇市、名護市、離島では宮古島市で活動拠点の基盤作りを行いました。2024年度は、文化座『しゃぼん玉』が本島の那覇市、うるま市、青年劇場『あの夏の絵』が離島の石垣市での上演を予定しています。今年度は準備の遅れもあり、名護市、宮古島市で効果的なプロモーション活動ができませんでした。その反省から、来年度は、事前の講演会やワークショップなどを早い段階で行い、地元の文化団体やメディアと協同して宣伝・営業体制を整えたいと考えています。

沖縄公演を実施するにあたって最大の課題はヒトとモノの移動コストです。他の地域と比べて往復の交通費と運搬費の負担が大きいのはもちろん、ハイシーズンでは宿泊費も高騰します。通常の巡回公演では、公演地を近隣地域でまとめて効率化を図り、交通費と運搬費を軽減することができますが、沖縄県ではそうはいきません。まして離島公演となると経費はさらに膨らみます。今回の事業を通して、沖縄県で演劇公演を実施するには、公的支援や企業協力に頼らざるを得ない現実を実感しています。

【共通】

本事業で取り組んだ『素劇 楢山節考』、『アカシアの雨が降る時』、津嘉山正種ひとり語り『命口説』『沖縄の魂』、いずれの作品も、生の舞台の魅力と迫力を伝えることができ、内容についても共感を得たことで、観客から高い評価をいただきました。

また各地域の自治体や協力団体と協同して地域課題の解決を目指した演劇ワークショップを開催したことで、演劇が社会生活の中で様々な有効性があることを実感してもらえました。開催した各地域のアンケートで共通することは、参加者の多くが演劇を身近に感じて楽しんだ事です。そして「今後、演劇やミュージカルを観てみたいですか」の設問には、100%の参加者が「見たい」と回答しています。

質の高い演劇公演やワークショップの実施が、すぐさま地域演劇の活性や演劇鑑賞者の増加に結びつくわけではありませんが、これらの活動を地道に継続することで、地域に「演劇を創る、観る」環境が徐々に形成されることを期待しています。そして今年度の課題をクリアしながら、「生活の中に演劇を」享受できる地域を増やしていきたいと思っています。

劇団青年座　紫雲 幸一

生活の中に演劇を―新しい活動拠点形成事業―

助成：文化芸術振興費助成金
舞台芸術等総合支援事業（キャラバン）
独立行政法人日本芸術文化振興会

2024年3月発行

発行　公益社団法人日本劇団協議会
〒160-0023　東京都新宿区西新宿6-12-30　芸能花伝舎3F
TEL: 03-5909-4600
email: info@gekidankyo.or.jp

編集・デザイン　前村晴奈

Special Thanks

●愛媛県八幡浜市
南予で演劇を観る会

●愛媛県新居浜市
ハートネットワーク

●沖縄県那覇市
沖縄タイムス社文化事業部、那覇商業高校、琉球放送

●沖縄県名護市
名護市地域経済部文化スポーツ課、名桜大学、名護市文化協会、伊江島郷友会

●沖縄県宮古島市
宮古島市教育委員会、宮古島市文化協会、宮古毎日新聞、宮古新報、宮古テレビ、エフエムみやこ、宮古島商工会議所、宮古島観光協会、宮古島市民劇団「びん座」、児童劇団「かなやらび」